

# 述語内容語的付加語を伴った 文の統語構造について

人 見 明 宏

## 0. 序

ドイツ語の形容詞には、付加語的用法、述語的用法、副詞的用法がある。

- (1) Das ist ein **schnelles** Auto. (付加語的用法)
- (2) Das Auto ist **schnell**. (述語的用法)
- (3) Das Auto fährt **schnell**. (副詞的用法)

付加語的用法の形容詞は、文肢を構成している部分であり、文肢構成部 (Gliedteil) と呼ばれる。一方、述語的用法と副詞的用法の形容詞は文肢 (Satzglied) である。述語的用法の形容詞の統語機能は述語内容語であり、副詞的用法の形容詞の統語機能は副詞的規定語である。また述語的用法の形容詞は、述語内容語の他に、述語内容語的付加語としても用いられる。

ドイツ語の形容詞は、付加語として名詞を規定する際は、名詞の性・数・格に応じた格語尾を取る。一方、述語内容語、述語内容語的付加語および副詞的規定語として用いられた形容詞は、格語尾を取らない。またドイツ語の形容詞は、**lang** (形容詞)、**lange** (副詞) といった一部を除き、派生語尾 (接尾辞) などを取らず、そのままの形で副詞的にも用いられるため、述語内容語、述語内容語的付加語および副詞的規定語として用いられた形容詞は、形態上は区別がつかない。以下の文 (4)~(8) で用いられている形容詞 **gesund** は、その統語機能がすべて異なる。

- (4) Sie ist **gesund**.
- (5) Sie kam **gesund** an.
- (6) Sie machte den Kranken wieder **gesund**.
- (7) Sie pflegte den Kranken wieder **gesund**.

(8) Sie lebt **gesund**.

**gesund** は、(4) では主語の述語内容語として、(5) では主語の述語内容語的付加語として、(6) では目的語の述語内容語として、(7) では目的語の述語内容語的付加語として、(8) では様態の副詞的規定語として用いられている。

本論文では、まず述語内容語について確認し、次に述語内容語的付加語の(統語的)特徴を述べる。そして、その結果から、述語内容語的付加語を伴った文の統語構造を明らかにし、依存関係文法でこの統語構造をいかに記述すべきかを考察する。その際、述語内容語および様態の副詞的規定語との比較も行っていく。

## 1. 述語内容語

まず、述語内容語的付加語と同じ述語的用法に属している述語内容語について見ていく。

A ist B. という関係が成り立つ場合、Bを述語内容語(Prädikativ)と呼ぶ。このとき、述語内容語(B)は、主語(A)の様態、状態、特性、あり方などを同定する(川島(編)(1994) S.739)。述語内容語として用いられた形容詞は述語形容詞(Prädikativadjektiv)とも呼ばれる<sup>1)</sup>。述語内容語は、主語の述語内容語と目的語の述語内容語に大別される。

### 1.1. 主語の述語内容語

述語内容語がその文の主語に関連する場合は、主語の述語内容語(Subjektspredikativ)と呼ばれる。主語の述語内容語と共に用いられる動詞は、同定の機能を有し、その代表的なものがコプラ(Kopula)のsein、werden、bleibenである<sup>2)</sup>。

(9) Er *ist* noch **jung**.

(10) Er *wird* nie **krank**.

(11) *Bleiben* Sie **gesund**!

さらに、以下の同定の機能を有する動詞も、形容詞の述語内容語と共に

用いられる<sup>3)</sup>。これらの動詞は個人的な評価を表しており (Dudenband 4.— Die Grammatik (2005) S.800)、これらと結び付いた述語内容語は「評価内容」を表している。

aussehen、scheinen、wirken 「……であるように見える」  
erscheinen、vorkommen 「(3格の人)にとって……のように思われる」  
dünken 「(4格の人)には……と思われる」

これらの動詞を用いた以下の例 (12) と (13) は、それぞれ a のように書き換えることができ、A ist B. という関係が成り立っている。したがって、(12) の freundlich、(13) の komisch は主語の述語内容語である。

- (12) Er *sieht* **freundlich** aus.  
→ a. Er macht den Eindruck, dass er freundlich ist.  
(13) Das *kommt* mir **komisch** vor.  
→ a. Das macht auf mich den Eindruck, dass das komisch ist.

## 1.2. 目的語の述語内容語

一方、述語内容語がその文の目的語に関連する場合は、目的語の述語内容語 (Objektsprädikativ) と呼ばれる。これはさらに、以下の二つのタイプに下位分類される。

### a) 評価内容の述語内容語

評価内容を表す主語の述語内容語と同様に、目的語の述語内容語も個人的な評価を表す動詞と共に用いられる<sup>4)</sup>。個人的な評価を表す動詞には、以下のものがある<sup>5)</sup>。

finden、sehen 「(4格目的語)を……と思う」  
heißen、nennen 「(4格目的語)を……と呼ぶ/言う」  
schelten 「(4格目的語)を……だと罵る」

これらの動詞を用いた以下の例 (14) と (15) も、それぞれ a のように書き換えることができ、A ist B. という関係が成り立っている (この A は、元の文の 4 格目的語である)。したがって、(14) の langweilig、(15) の feige

は目的語の述語内容語である。

(14) Ich *finde* den Roman **langweilig**.

→ a. Ich finde / meine, dass der Roman langweilig ist.

(15) Man *nennt* ihn **feige**.

→ a. Man sagt, dass er feige ist.

#### b) 結果の述語内容語

このタイプで生起する形容詞は、動詞が表す行為・事象によって引き起こされる結果を表し、結果の述語内容語 (resultatives Prädikativ) と呼ばれる<sup>6)</sup>。そのような結果の述語内容語と共に用いられる動詞には、以下のものがある。

halten 「(4格目的語)を……にしておく」

lassen 「(4格目的語)を……のままにしておく」

machen 「(4格目的語)を……にする」

stimmen 「(4格目的語)を……の気分にさせる」

これらの動詞を用いた以下の例(16)と(17)も、それぞれaのように書き換えることができ、ここでも A ist / bleibt / wird B. という関係が成り立っている(このAも、元の文の4格目的語である)。したがって、(16)と(17)の warm は共に目的語の述語内容語である。

(16) Sie *hält* die Suppe **warm**.

→ a. Sie bewirkt, dass die Suppe warm bleibt.

(17) Sie *macht* die Suppe **warm**.

→ a. Sie bewirkt, dass die Suppe warm wird.

## 2. 述語内容語的付加語

述語内容語がコプラなど同定の機能を持つ動詞と共に用いられるのに対して、同定の機能を持たない動詞と共に述語的用法の形容詞が現れることがある。そのような形容詞は、コプラと共に述語内容語に書き換えること

が可能である。また多くの場合、付加語に書き換えることも可能であるため、述語内容語的付加語 (prädikatives Attribut)<sup>7)</sup>と呼ばれる。以下の例 (18) と (19) の動詞 sterben、essen に同定の機能はない。しかし形容詞 jung、roh は、a のようにコプラ sein と共に述語内容語に、また b のように付加語に書き換えることができる。

(18) Der Künstler starb **jung**.

→ a. Als der Künstler starb, war er **jung**. (述語内容語)

→ b. Der **junge** Künstler starb. (付加語)

(19) Er aß den Fisch **roh**.

→ a. Als er den Fisch aß, war der Fisch **roh**. (述語内容語)

→ b. Er aß den **rohen** Fisch. (付加語)

(18) では形容詞 jung は主語 der Künstler に関連しているため、主語の述語内容語的付加語 (prädikatives Attribut zum Subjekt) と呼ばれる。また (19) では形容詞 roh は目的語 den Fisch に関連しているため、目的語の述語内容語的付加語 (prädikatives Attribut zum Objekt) と呼ばれる。

上記の (18) と (19) から明らかなように、主語の述語内容語的付加語は、「(主語が) ……の状態」という、動詞の表す事象が生じたときや行為が行われるときの主語の状態を表す。また目的語の述語内容語的付加語は、「(目的語を) ……の状態」という、目的語の状態を表す。これらは叙述の述語内容語的付加語<sup>8)</sup>と呼ばれる。一方、目的語の述語内容語的付加語は、「(……することによって目的語を) ……の状態にする」という、動詞の表す行為によって生じる目的語の結果的状态をも表し、これを結果の述語内容語的付加語と呼ぶ。以下の例 (20) で用いられている形容詞 weiß は、a : 同定の機能を持つ machen、または b : コプラ werden と共に述語内容語に書き換えることができる。ただし、結果の述語内容語的付加語は、目的語に対する叙述の述語内容語的付加語とは異なり、c のように付加語に書き換えることはできない<sup>9)</sup>。

(20) Er streicht die Wand **weiß**.

→ a. Indem er die Wand streicht, macht er die Wand **weiß**. (述語内容語)

→ b. Er streicht die Wand so, dass die Wand **weiß** wird. (述語内容語)

→ c. Er streicht die **weiße** Wand. (付加語)

以下では、述語内容語的付加語を述語内容語および様態の副詞的規定語と比較して、述語内容語的付加語の(統語的)特徴について考察する<sup>10)</sup>。

## 2.1. 補足成分・添加成分

まず、述語内容語、述語内容語的付加語および様態の副詞的規定語に関して、それらが動詞に支配された補足成分(Ergänzung)であるのか、または動詞に支配されていない添加成分(Angabe)であるのかを考察する。

述語内容語は、以下の(21)~(24)のaのように、それを削除すると非文になるか、または元の文とは異なる意味になってしまうため、補足成分である。

(21) Er ist noch **jung**.

→ a. Er ist noch.

(22) Er sieht **freundlich** aus.

→ a. Er sieht aus.

(23) Ich finde den Roman **langweilig**.

→ a. Ich finde den Roman.

(24) Sie macht die Suppe **warm**.

→ a. Sie macht die Suppe.

様態の副詞的規定語は、当該の文で用いられている動詞の結合価によって、補足成分か添加成分かが決定される。(25)の動詞 *behandeln* は *mit jemandem / etwas in einer bestimmten Weise umgehen / verfahren* を表し、主語、4格目的語および様態の副詞的規定語を支配する3価動詞であり、aのように様態の副詞的規定語 *freundlich* は削除できないため、これは補足成分である。これに対し、(26)の動詞 *grüßen* は主語と目的語を支配する2価動詞で、様態の副詞的規定語は支配していないため、aのように *freundlich* は削除しても非文にはならず、これは添加成分である。

(25) Sie behandelte ihre Gäste **freundlich**.

→ a. Sie behandelte ihre Gäste.

(26) Sie grüßte ihre Gäste **freundlich**.

→ a. Sie grüßte ihre Gäste.

述語内容語的付加語は、動詞の支配を受けておらず、添加成分である (Helbig / Buscha (2001) S.464)。そのため、以下の例 (27)~(29) において、a のようにそれを削除しても非文にはならず、また、削除された形容詞の意味を除けば、元の文意と異なることもない。

(27) Der Künstler starb **jung**.

→ a. Der Künstler starb.

(28) Er aß den Fisch **roh**.

→ a. Er aß den Fisch.

(29) Er streicht die Wand **weiß**.

→ a. Er streicht die Wand.

## 2.2. 関連する語との書き換え

すでに見てきたように、主語の述語内容語と述語内容語的付加語が関連する語は、主語である。また、目的語の述語内容語と述語内容語的付加語が関連する語は、目的語である。一方、様態の副詞的規定語が関連する語は、動詞である。この点に関して、以下では、コプラなどを用いた書き換えが可能か否かによって考察していく。

### 2.2.1. 補足成分

述語内容語、述語内容語的付加語、様態の副詞的規定語のうち、動詞の補足成分であるのは、述語内容語と一部の様態の副詞的規定語である。

まず、主語の述語内容語であるが、これが用いられている文の動詞がコプラ (sein, werden, bleiben) の場合は、他のコプラによる書き換えであれば可能である。

(30) Er *ist / bleibt / wird* **gesund**.

一方、以下(31)のように、コブラ以外の同定の機能を持つ動詞の場合、すなわち主語に対する評価内容の述語内容語が用いられている場合は、aのようにコブラと主語の述語内容語に書き換えることができる。

(31) Er sieht **freundlich** aus.

→ a. Er macht den Eindruck, dass *er* **freundlich** ist.

また(32)のように、目的語に対する評価内容の述語内容語の場合は、aのように元の文の目的語 *den Film* を主語にした、コブラと主語の述語内容語に書き換えることができる。

(32) Er findet den Film **interessant**.

→ a. Er findet /meint, dass *der Film* **interessant** ist.

次に(33)目的語に対する結果の述語内容語の場合は、元の文の目的語 *den Tisch* を主語とした、コブラ(この場合は *werden*)と主語の述語内容語に書き換えることができる。

(33) Sie macht den Tisch **sauber**.

→ a. Sie bewirkt / macht, dass *der Tisch* **sauber** wird.

最後に、(34)における補足成分の様態の副詞的規定語は、a:元の文の動詞 *riechen* から派生した名詞 *Geruch* を主語とした、コブラと主語の述語内容語に書き換えることができる。これに対して、主語の述語内容語の場合は可能であったが、様態の副詞的規定語は、b:元の文の主語 *der Kaffee* と述語内容語には書き換えることができない。この点で、同じ補足成分であっても、述語内容語と様態の副詞的規定語では関連する語が異なっていることが分かる。

(34) Der Kaffee roch **wunderbar**.

→ a. *Der Geruch* (des Kaffees) war **wunderbar**.

→ b. *Der Kaffee* war **wunderbar**.

## 2.2.2. 添加成分

添加成分である述語内容語的付加語と様態の副詞的規定語は、補足成分と異なり、削除しても当該の文は非文にならないため、その区別が難しいときがある。そのような際には、以下の書き換えが有効である (Dudenband 4.—Die Grammatik (2005) S.801 f., Helbig / Buscha (2001) S.307, S.465 f., Hentschel / Weydt (1994) S.205 f., S.399, Flämig (1991) S.113, S.495, 川島 (編) (1994) S.740)。

- a : 主語の述語内容語的付加語は、コブラと主語の述語内容語に書き換えることができる。
- b : 目的語に対する叙述の述語内容語的付加語は、元の文の目的語を主語にして、コブラと主語の述語内容語に書き換えることができる。
- c : 添加成分の様態の副詞的規定語は、元の文の動詞 (から派生した名詞など) を主語にして、コブラと主語の述語内容語に書き換えることができる。
- d : さらに、主語の述語内容語的付加語と目的語に対する叙述の述語内容語的付加語は、それぞれ関連する主語または目的語の付加語に書き換えることもできる。

(35) Der Mann trank **nachdenklich** den Kaffee.

(主語の述語内容語的付加語)

- a. Als der Mann den Kaffee trank, war *der Mann* **nachdenklich**.
- b. Als der Mann den Kaffee trank, war der Kaffee nachdenklich.
- c. Als der Mann den Kaffee trank, war das Trinken nachdenklich.
- d. Der **nachdenkliche** Mann trank den Kaffee.

(36) Der Mann trank den Kaffee **schwarz**.

(目的語の述語内容語的付加語 ; 叙述)

- a. Als der Mann den Kaffee trank, war der Mann schwarz.
- b. Als der Mann den Kaffee trank, war *der Kaffee* **schwarz**.
- c. Als der Mann den Kaffee trank, war das Trinken schwarz.
- d. Der Mann trank den **schwarzen** Kaffee.

(37) Der Mann trank **langsam** den Kaffee.

(様態の副詞的規定語；添加成分)

- a. Als der Mann den Kaffee trank, war der Mann langsam.
- b. Als der Mann den Kaffee trank, war der Kaffee langsam.
- c. Als der Mann den Kaffee trank, war *das Trinken* **langsam**.

また、(38)における目的語に対する結果の述語内容語的付加語は、a：同定の機能を持つ動詞 *machen* と目的語の述語内容語に、または b：元の文の目的語を主語にして、コプラ（この場合は *werden*）と主語の述語内容語に書き換えることができる。しかし、cのように目的語の付加語に書き換えることはできない。

(38) Sie putzt den Tisch **sauber**. (目的語の述語内容語的付加語；結果)

- a. Indem sie den Tisch putzt, macht sie *den Tisch* **sauber**.
- b. Sie putzt so, dass *der Tisch* **sauber** wird.
- c. Sie putzt den **sauberen** Tisch.

### 2.3. 述語内容語的付加語の特徴のまとめ

述語内容語的付加語の特徴を述語内容語および様態の副詞的規定語と比較した結果をまとめたものが、以下の表である<sup>11)</sup>。

統語機能	補足成分・添加成分	関連する語	付加語化
主語の述語内容語（評価内容）	補足成分	主語	可能
目的語の述語内容語（評価内容）		目的語	不可能
目的語の述語内容語（結果）			
主語の述語内容語的付加語（叙述）	添加成分	主語	可能
目的語の述語内容語的付加語（叙述）		目的語	不可能
目的語の述語内容語的付加語（結果）			
様態の副詞的規定語	補足成分 / 添加成分	動詞	—

## 3. 述語内容語的付加語を伴った文の統語構造

ここでは、2で考察した結果から、述語内容語的付加語を伴った文の統

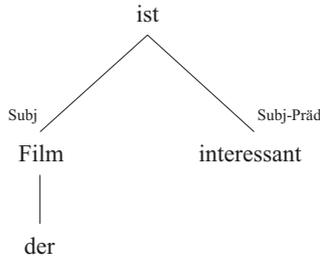
語構造を明らかにし、依存関係文法でこの統語構造をいかに記述すべきかを考察する。その際、述語内容語および様態の副詞的規定語と比較することも必要になる。

まず、述語内容語と様態の副詞的規定語が生じた文の統語構造を依存関係文法の樹形図で確認する。次に述語内容的付加語の生じた文の統語構造について考察する。

### 3.1. 述語内容語

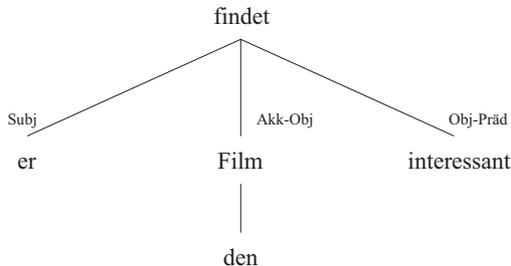
述語内容語は、主語の述語内容語であれ、目的語の述語内容語であれ、動詞に支配された補足成分である。主語の述語内容語が生じた文の統語構造は、依存関係文法の樹形図で以下のように記述される<sup>12)</sup>。

(39) Der Film ist **interessant**. (主語の述語内容語)

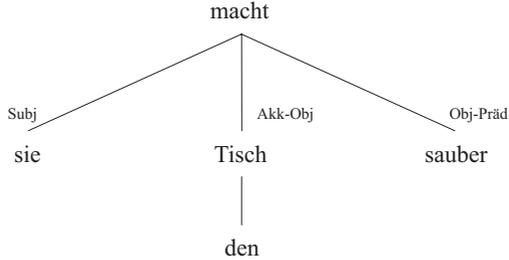


目的語の述語内容語に関しては、(40) は評価内容の述語内容語、(41) は結果の述語内容語が生じた文の統語構造である。

(40) Er findet den Film **interessant**. (目的語の述語内容語；評価内容)



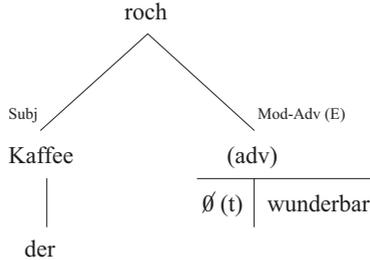
(41) Sie macht den Tisch **sauber**. (目的語の述語内容語；結果)



### 3.2. 様態の副詞的規定語

様態の副詞的規定語は、動詞に支配された補足成分としても、また動詞に支配されていない添加成分としても用いられる。そのため樹形図では、補足成分は (E)、添加成分は (A) と記載する。まず、補足成分の様態の副詞的規定語が用いられた文の統語機能は、以下のとおりである。

(42) Der Kaffee roch **wunderbar**. (様態の副詞的規定語；補足成分)



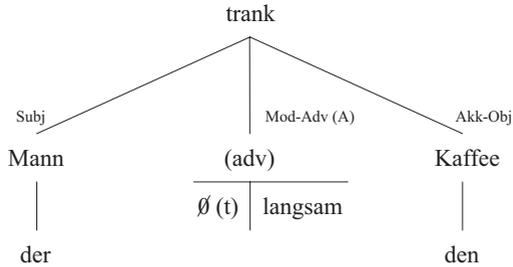
ドイツ語の形容詞は、一部を除けば、そのままの形態で副詞的に用いられる。副詞的用法の形容詞は、多くの場合、様態の副詞的規定語として機能する。その際、Tesnière の依存関係文法では一次変換 (Translation 1. Grades) によって形容詞が副詞に相当する語句に変換される。(42) では、形容詞 wunderbar が変換詞 (Translativ, Translator) ∅ (ゼロ) と結びついて副詞相当語句 (adv) に変換されていることを示している。

一方、添加成分の様態の副詞的規定語は、動詞の表す事象・行為などのあり方などを表しており、動詞に関連しているため、補足成分と同様に、

動詞と結合線で結ばれるが、動詞に支配されていない添加成分であることを (A) で明示する。

(43) Der Mann trank **langsam** den Kaffee.

(様態の副詞的規定語；添加成分)



### 3.3. 述語内容語的付加語

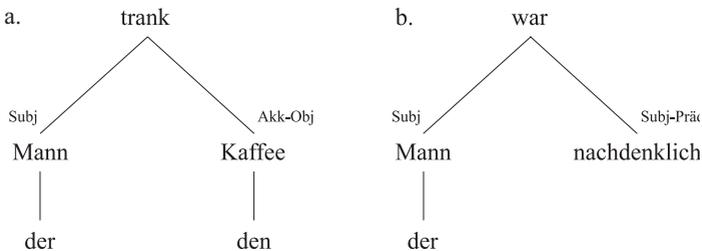
まず、主語の述語内容語的付加語について考察する。主語の述語内容語的付加語が用いられた文 (44) は、2 での考察の結果、a と b の二つの文がいわば統合されたものと考えられることができる。

(44) Der Mann trank **nachdenklich** den Kaffee.

(主語の述語内容語的付加語)

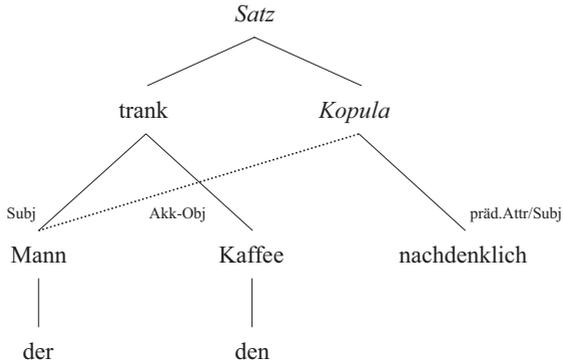
= a. Der Mann trank den Kaffee. + b. Der Mann war nachdenklich.

そして、(44) a と b の樹形図は、以下のように記述される。



この二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (44) の統語構造は、

以下の樹形図で記述される。



この樹形図で表されているのは、以下の点である<sup>13)</sup>。

- 1) 主語の述語内容的付加語 *nachdenklich* は文肢（を形成する句の主要部）である。*Mann* および *Kaffee* もそれぞれ文肢を形成する句の主要部であり、そのため、これらは階層性の同じレベルに現れる。
- 2) 文 (44) b のコプラ *sein* は、a と統合されて生じた文 (44) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、*sein* などの具体的な動詞ではなく、単に *Kopula* と記述する。そして、動詞 *trinken* および *Kopula* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示するために、これらのさらに上位に *Satz* という概念を導入する<sup>14)</sup>。
- 3) 主語の述語内容的付加語は添加成分であり、動詞によって支配された補足成分ではない。また、これは主語に関連しており、同じ添加成分ではあるが、(43) の様態の副詞的規定語 *langsam* のように動詞に関連しているのではない。したがって、*nachdenklich* は動詞 *trinken* とは結合線で結ばれない。そして、このことによって *nachdenklich* は添加成分であることが明示されるため、添加成分の様態の副詞規定語に付加された (A) を記載する必要はない。
- 4) *Kopula* に支配されている語の統語機能（この場合は主語と主語の述語内容語）は、樹形図には記述しない。したがって、

nachdenklich の統語機能は（文 (44) b においては述語内容語であるが）文 (44) においては述語内容語的付加語として機能していることが示されている。

- 5) *Kopula* と主語 (*der*) *Mann* とを結び付けている結合線は、主語と *nachdenklich* の関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結 (*Konnexion*)<sup>15)</sup> と区別するために、点線で表す。

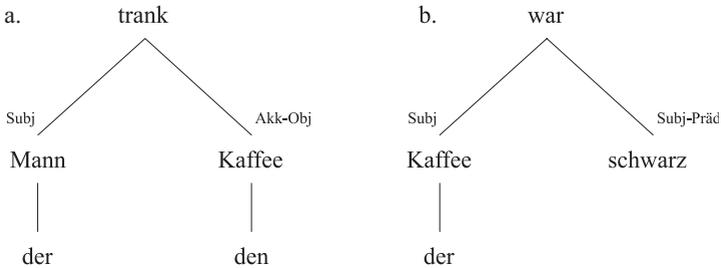
次に、目的語の述語内容語的付加語であるが、これには叙述の述語内容語的付加語と結果の述語内容語的付加語とがある。まず、叙述の述語内容語的付加語について考察する。叙述の述語内容語的付加語が用いられた文 (45) は、主語の述語内容語的付加語と同様に、a と b の二つの文が統合されたものと考えられる。

(45) *Der Mann trank den Kaffee schwarz.*

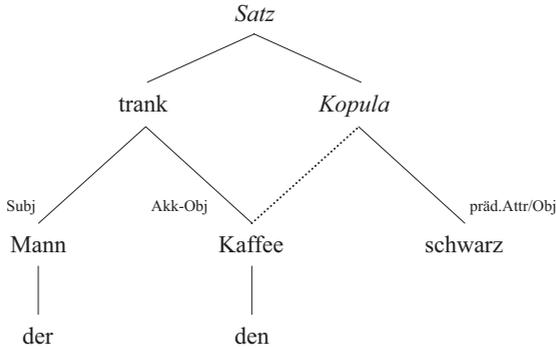
(目的語の述語内容語的付加語；叙述)

= a. *Der Mann trank den Kaffee.* + b. *Der Kaffee war schwarz.*

そして、(45) a と b の樹形図は、以下のとおりである。



この二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (45) の統語構造は、以下のように樹形図で記述される。



目的語に対する叙述の述語内容的付加語は、主語の述語内容的付加語の場合と以下の点のみが異なっている。

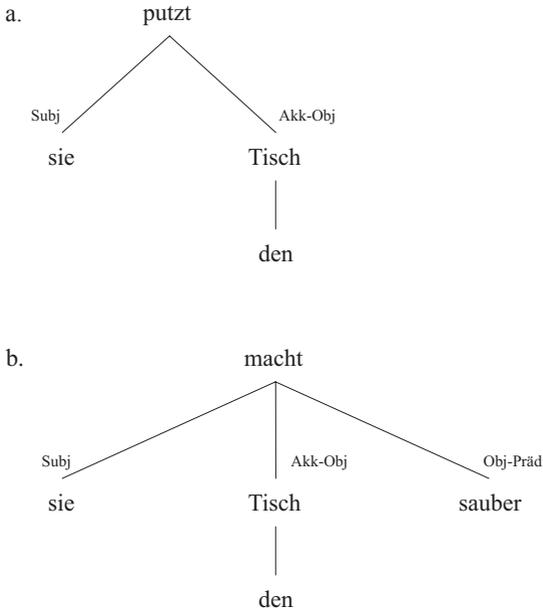
- 6) 文 (45) b でコプラ sein と結び付いた der Kaffee は 1 格の主語である。しかし、文 (45) の樹形図にはコプラが言語表現として現れていないため、樹形図では実際に言語表現に現れている trinken の 4 格目的語 den Kaffee で記述する。
- 7) *Kopula* に支配されている語の統語機能 (この場合は主語と主語の述語内容語) は、樹形図には記述しない。したがって、schwarz の統語機能は (文 (45) b においては主語の述語内容語であるが) 文 (45) においては目的語の述語内容的付加語として機能していることが示されている。

最後に、結果の述語内容的付加語であるが、これが用いられた文 (46) も、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

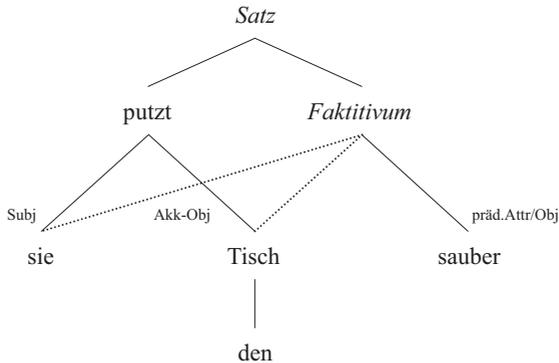
- (46) Sie putzt den Tisch **sauber**. (目的語の述語内容的付加語；結果)  
 = a. Sie putzt den Tisch. + b. Sie macht den Tisch sauber.<sup>16)</sup>

そして、(46) a と b は樹形図で以下のように記述される。

述語内容的付加語を伴った文の統語構造について



a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (46) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



目的語に対する結果の述語内容的付加語は、主語の述語内容的付加語および目的語に対する叙述の述語内容的付加語と場合と以下の点が異なっている。

- 8) 文(46) b で用いられている動詞はコプラではなく、同定の機能を持つ作為動詞 (Faktitivum) の *machen* である<sup>17)</sup>。これは、a と統合されて生じた文(46) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Faktitivum* と記述する。
- 9) *Faktitivum* と主語 *sie* および目的語 (den) *Tisch* とを結び付けている結合線は、主語および目的語と *sauber* の関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結と区別するために、点線で表す。

#### 4. まとめ

本論文では、述語内容語的付加語が用いられている文の統語構造について考察してきた。その結果、述語内容語的付加語が用いられている文は、二つの文が統合されて生じた文と考えることができることが明らかになった。そして、この二つの文のうち的一方には、言語表現には実際には現れていない動詞 *Kopula* および *Faktitivum* を設定し、この二つの文の統語構造が一つの統語構造に統合されていることを明示するために、これら二つの統語構造のさらに上位に *Satz* という概念を導入することによって、述語内容語的付加語が用いられている文の統語構造を依存関係文法の理論において正確に捉えることができ、またその統語構造を樹形図でいかに記述すべきかを明らかにした。

なお、本論文で主張されたこれらの点は、関口存男の言う「搬動語法」(例: *Er trank seinen Kollegen unter den Tisch.*) (関口(1983) S.459 f., 有田(1990) S.90) の統語構造にも適用できると思われる。この点に関しては、改めて考察したい。

#### 注

- 1) 述語内容語として用いられるのは、形容詞の他に名詞句などもあるが、本論文では形容詞を対象にしているため、形容詞以外の述語内容語については言及しない。なお、以下において述語内容語とは、述語形容詞を指している。
- 2) どの動詞がコプラであるかという点に関しては、多少統一がとれていない。たとえば、Hentschel / Weydt (1994) では、*sein* のみを *Kopula* とし、*werden*、

- bleiben および scheinen, wirkenなどを Kopulaverb と称している (Hentschel / Weydt (1994) S.204)。
- 3) gelten など、述語内容語が als または für と結び付くものもある。
  - 4) 特に名詞の述語内容語 (述語名詞) と共に用いられる動詞には、「評価」以外の、「命名」などの意味を表すものもある。
  - 5) 述語内容語が für と結び付く halten や、als と結び付く bezeichnen などもある。
  - 6) Dudenband 4.—Die Grammatik (2005) S.801 f., S. 957を参照。また有田 (1990) では、「結果挙述」という名称が用いられている (有田 (1990) S.85)。
  - 7) この統語機能に対する名称は、必ずしも統一されていない。たとえば、Dudenband 4.—Die Grammatik (2005) では prädikative Angabe が用いられているが、他にも freies Prädikativ と Koprädikativ が挙げられている (Dudenband 4.—Die Grammatik (2005) S. 800)。しかし、本論文では、最も広く用いられている「述語内容語的付加語 (prädikatives Attribut)」を使用する。
  - 8) Dudenband 4.—Die Grammatik (2005) では、述語内容語と述語内容語的付加語の両者を含めて、depiktives Prädikativ という名称を用いている (Dudenband 4.—Die Grammatik (2005) S. 800 f.)。
  - 9) 以下、例文の書き換えで用いられている矢印⇒は、書き換えが不可であることを示している。
  - 10) 述語内容語と述語内容語的付加語の語順に関しては、以下の点が挙げられる。すなわち、これらは、前域を除いては、これらが関連する語 (主語または目的語) よりも後方に生起しなくてはならない (Hentschel / Weydt (1994) S.206, S.400)。たとえば、以下の文 (47) では、nackt は主語と目的語のどちらにも関係し得るため、主語の述語内容語的付加語および目的語の述語内容語的付加語のどちらの解釈も成り立つ。

(47) Der Künstler malt das Modell **nackt**. (中山 (1996) S. 55)

一方、(48) の場合は、nackt はその語順から主語の述語内容語的付加語としか解釈されない。

(48) Der Künstler malt **nackt** das Modell.
  - 11) 本論文では、コプラを sein, bleiben, werden の三つに限定しているため、以下の表ではコプラと結び付いた主語の述語内容語は省いてある。
  - 12) 依存関係文法の樹形図は、たとえば生成文法のそれとは異なり、その記述の仕方、略号などに関して、(遺憾なことであるが) 不統一である。本論文では、Tesnière および代表的な依存関係文法の研究者の樹形図を参考に行っている。また、本論文の樹形図で用いられている略号の意味は、以下のとおりである。

Subj : 主語 (Subjekt)

Akk-Obj : 4 格目的語 (Akkusativobjekt)

Mod-Adv : 様態の副詞的規定語 (Modaladverbiale)

Subj-Präd : 主語の述語内容語 (Subjektsprädikativ)

Obj-Präd : 目的語の述語内容語 (Objektsprädikativ)

präd.Attr/Subj :

主語の述語内容語的付加語 (prädikatives Attribut zum Subjekt)

präd.Attr/Obj :

目的語の述語内容語的付加語 (prädikatives Attribut zum Objekt)

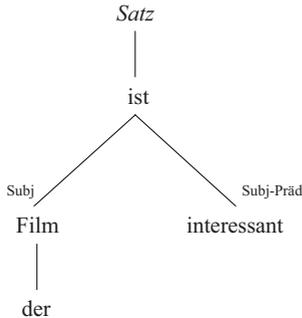
E : 補足成分 (Ergänzung)

A : 添加成分 (Angabe)

adv : 副詞相当語句

t : 変換詞 (Translativ、Translator)

- 13) 樹形図において *nachdenklich* が *Kaffee* よりも右に記載されているが、これは依存関係文法では(一部の研究者を除いて)階層性を解明することが目的であって、線条性は考慮されないためである。
- 14) 依存関係文法に *Satz* という概念を導入している研究者は他にもいる。たとえば、*Eroms* や *Tarvainen* はこれを *S* で表示している。ただし、これらの概念は必ずしも一致していない (*Eroms* (2000), *Tarvainen* (2000))。また、*Satz* という概念は、(39)~(43)の樹形図にも適用できる。たとえば、(39)の場合はこれを適用すると、以下の樹形図になる。



- 15) *Tesnière* の依存関係文法において、連結とは、文中の言語要素間の抽象的な依存関係を表す。文を構成する言語要素は、支配成分と依存成分から成り、支配成分は依存成分を支配し、依存成分は支配成分に依存する。この関係が依存関係であり、依存関係にある二つの要素(支配成分と依存成分)を結びつけているのが連結である。
- 16) (46) b は、*Der Tisch wird sauber.* も可能である。しかしここでは、叙述では

なく、結果の述語内容的付加語であることを明示するために、動詞 *machen* を用いる。

- 17) ここで言う作為動詞とは、形容詞と *machen* で言い換えられる形容詞派生の動詞、たとえば *wärmen* (*warm machen*) を指しているのではなく、「主に主語の動作・行為が目的語に及んだ結果として、特定の状態を表わす動詞」(田中(編)(1988) S.211) を指している。*machen* は後者の作為動詞に属する。また有田(1990)においても、「*machen* 型は *Faktivum*、*Faktiv* (作為語法)」と言える(有田(1990) S. 90)。

### 参考文献

- 有田 潤(1990): ドイツ語学講座 IV. 南江堂.  
Dudenband 4.—Die Grammatik (1984). Hrsg. von Günther Drosdowski. 4. Aufl. Mannheim.  
Dudenband 4.—Die Grammatik (2005). Hrsg. von der Dudenredaktion. 7. Aufl. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.  
Dürscheid, Christa (2000): Syntax. Grundlagen und Theorien. Wiesbaden.  
Eisenberg, Peter (2004): Grundriß der deutschen Grammatik. Band. 2: Satz. Stuttgart / Weimar.  
Engel, Ulrich (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.  
—— (1994): Syntax der deutschen Gegenwartssprache. 3. Aufl. Berlin.  
Engel, Ulrich / Helmut Schumacher (1978): Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 2. Aufl. Tübingen.  
Engel, Ulrich / Meliss, Meike (Hrsg.) (2004): Dependenz, Valenz und Wortstellung. München.  
Eroms, Hans-Werner (2000): Syntax der deutschen Grammatik. Berlin, New York.  
Flämig, Walter (1991): Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Berlin.  
Flämig, Walter et al. (1981): Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.  
浜崎 長寿 / 橋本 政義 (2004): 名詞・代名詞・形容詞. 大学書林.  
Helbig, Gerhard / Joachim Buscha (2001): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin, München.  
Helbig, Gerhard / Wolfgang Schenkel (1975): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. Leipzig.  
Hentschel, Elke / Harald Weydt (1994): Handbuch der deutschen Grammatik. 2. Aufl. Berlin, New York.  
—— (2003): Handbuch der deutschen Grammatik. 3. Aufl. Berlin, New York.

- 人見 明宏(2007): 依存関係文法における相関詞 es + 文肢文について. In: 愛知県立大学外国語学部紀要第39号(言語・文学編)、S. 325-341.
- (2008): 「代名詞的副詞」の統語範疇について. In: 愛知県立大学外国語学部紀要第40号(言語・文学編)、S. 303-322.
- (2009): da(r) + 前置詞と文肢文との「相関」について. In: 愛知県立大学外国語学部紀要第41号(言語・文学編)、S. 195-212.
- 川島 淳夫(編)(1994): ドイツ言語学辞典. 紀伊國屋書店.
- 菊池 慎吾 / 鐵野 善資(1996): 独和中辞典. 研究社.
- Lee, Sun-Muk (1994): Untersuchung zur Valenz es Adjektivs in der deutschen Gegenwartssprache. Die morphosyntaktische und logisch-semantische Bestimmung der Ergänzungen zum Adjektiv.
- 中山 豊(1996): コレクション・ドイツ語8 文法. 白水社.
- Pittner, Karin / Judith Berman (2004): Deutsche Syntax. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.
- Schumacher, Helmut / Jacqueline Kubczak / Renate Schmidt / Vera de Ruiter (2004): VALBU—Valenzwörterbuch der deutschen Verben. Tübingen.
- 関口 存男(1983): 独作文教程. 三修社.
- Sommerfeldt, Karl-Ernst / Herbert Schreiber (1983): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive. Leipzig.
- Stănescu, Speranța (Hrsg.) (2004): Die Valenztheorie. Bestandsaufnahme und Perspektiven. Frankfurt am Main.
- 田中 春美(編)(1988): 現代言語学辞典. 成美堂.
- Tarvainen, Kalevi (2000): Einführung in die Dependenzgrammatik. Tübingen.
- Tesnière, Lucien (1980): Grundzüge der strukturalen Syntax. Hrsg. u. übers. von Ulrich Engel. Stuttgart.
- Weber, Heinz Josef (1992): Dependenzgrammatik. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.
- Wöllstein-Leisten, Angelika / Axel Heilmann / Peter Stepan / Sten Vikner (1997): Deutsche Satzstruktur. Grundlagen der syntaktischen Analyse. Tübingen.
- 在間 進(1992): 詳解ドイツ語文法. 大修館書店.
- Zifonun, Gisela / Ludger Hoffmann / Bruno Strecker et al. (1997): Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bde. Berlin, New York.